

日本の公立学校の特色の一つが教職員の異動である。そんなもの当たり前だというのが多くの日本人の感覚だと思うが、世界には異動のないところがたくさんある。さらには、担任する学年も変わらないところだってある。どっちがいいのかはわからない。何十年も同じ学校の同じ学年を担任することを想像してみると、それはそれで利点のようにも思える。教える内容や技術は繰り返すうちに練れていくし、教科書の文章だって諳んじられるようになるだろう。その年齢への理解も深まり、地域の事情にも精通する。そんな専門家がいたら有益だ。

一方で、異動があつてよかつたとも思う。ぼくは残念ながら低学年を担当しないまま教員生活を終えたが、たいていの小学校教員なら一年生から六年生までの劇的な成長期をそれぞれ経験する。学校も長くて七年までしかいられないので、いろんな地域に赴くことになる。慣れるまでは大変なのだが、慣れないということとは新鮮ということでもあり、意欲を支える。

奥出雲町の高尾小学校には四年間いたが、ここは際だつて強い刺激を受けた。それは、高尾小学校が特異な学校だからである。ぼくが赴任した十年前で児童数が十一名だった。全校で。現在は五名だ。全校で。これだけ児童数の少ない学校に赴任できる確率はかなり

低い。おかげでぼくはレアな経験をした。

学年の最少人数が一人、つまり一人で入学して、一人で卒業していく子どもがいる学校で、ただ多人数用フォーマットの教育をしているいんだらうか、なんかおもしろいことしなきゃ、と思つたときに浮かんだのが落語だった。落語は一人でできる。相手は何人だろうと構わない。場所だつて、座布団一枚置ければどこでもできる。「座布団一枚からの挑戦」というキャッチフレーズを思いついて、落語のイメージさえ持たぬ子どもたちと始めた。

始めてから十年が経つ。ぼくは、高尾小学校を四年で異動した。落語は続いた。その年その年の児童や教職員スタッフの思いを乗せて、出会う人や活動の内容を変化させながら一座の「にこにこ寄席」は続いている。つい先頃、「にこにこ寄席」が博報教育財団の博報賞を受賞した。全国規模で認められたのだ。受賞を記念した「にこにこ寄席」が学校で開かれる。

- ・日時 十一月二十七日(日) 午後一時半開演
- ・会場 奥出雲町立高尾小学校

当日は、東京から円楽一門の三遊亭楽麻呂師匠もお祝いに来て一席披露される予定だ。あからさまな宣伝をお許しいただきたい。全校五名のチャレンジャーたちにぜひ会いに来てください。入場無料です。

專業ババ奮闘記 (その2) 118

木幡智恵美

秋 (7)

娘たちの家は玉湯の湯町にある。すぐ近くにおもじろ釜という湯が沸き出ているところが、温泉卵を作りによく客が来る。この釜が玉造温泉の温泉源だそうで、家の横には結構な頻度で管理をする人が来て、作業を行っている。

十一月に入り、歩くには絶好の季節になった。寛大と過ごす土曜日、「ババ、足湯行こうよ」というので、水筒とタオル、そしてマスクを持って、温泉街まで歩いた。「あ、あそこに鯉がいる」「トンボだ」と寛大はあれこれ見つけては何度も立ち止まる。私はどうしても畑の作物に目が行ってしまう。玉湯川沿いを温泉街へと進んでいく。観光客がちらほらと見え始めたので、「寛大、マスクつけて」と言う。「下に降りたい」と寛大が言うので、橋の付け根についている階段を降り、川べりを進むことにした。大きな石を見つけては上がり、「落ちるよ」と声を掛けながら歩いて行く。そのうち、川の水から湯気が立っているところに着いた。本流とは石で区切られていて、高めの湯とぬるめの湯も仕切つてある。「これが本当の足湯だね。入るか」と言うのと、「ええ、いつもの足湯がいい」と寛大が言うので、ゆうゆの近くの足湯に行つてみた。けれども、まだ早すぎるのかロープが張られている。そのまま史跡公園へと上がり、トンボ捕りなどして、再び足湯に下りた。それでもロープのままだったので、川辺の足湯に浸かりに行った。最初はぬるめのお湯に入り、次は高めの湯へ。コロナ禍のせいか観光客はまばらで、足湯は貸し切り状態。何とせいたく体験だ。寛大は川の方に足を浸け、「冷た」と言つて、また足湯に入つて来た。北海道に夫とツーリングした時、網走方面から南へ向かう途中、羅臼川沿いの温泉に入ったことを思い出す。熊の湯という地元の人たちが管理している温泉だった。小さな小屋があり、風呂は露天、白濁した湯に浸かりながら、最上のひと時だった。足湯に浸かりながら、同じような気分浸っている。「お母ちゃんたちとも来たいな」と寛大は言いながら、タオルで濡れた足を拭いていた。

その次の土曜日、行先は足湯。今回はお弁当を作り、足湯に浸かつた帰りには史跡公園でトンボやバッタを追いかけ、弁当を広げた。秋満喫の一日となった。

30代フリーター やあ、ジイさん。習近平が中国共産党の総書記として3期目に入ることが確実視されている。

年金生活者 2期までという慣例を破り、事実上の終身の総書記として中華「帝国」の「皇帝」になる姿勢を鮮明にしたと受け取ることができている。

習の「皇帝」化を許しているのは、世界的な「帝国」の「復活」だ。ウエストフアリア条約のあと発展を遂げた「主権国家」群に押されてかつての力を失っていた中国、トルコ、インドといった古い「帝国」が今世紀に入って勢いを盛り返している。そして西側諸国を率いるアメリカもまた新しい「帝国」として力を振るい続けている。

グローバル化した資本主義は個々の「主権国家」による経済のコントロールを困難にし、国連やEU、G7といった国家間システムによる制御を余儀なくさせている。その結果「主権国家」の権力の一部が国家間システムに移った。「帝国」は国家間システムの一つであり、「主権国家」の権力の一

年金 この段階の資本主義で最も利潤を生む労働力は不自由で不平等な労働力、言い換えれば市場でいつでも自由に売買できるとは限らない、稀有な労働力だ。「稀有な」というのはイノベーションを引き起こすことができるという意味だ。イノベーションこそポスト産業資本主義の利潤の源泉だからだ。中国が政治的には不自由で不平等な「帝国」でありながら、経済は世界第2位のGDPに到達した大きな理由のひとつがそこにある。

「帝国」が古くからある国家間システムの一種である以上、国家から国家間システムへの権力の分散は「帝国」の時代への回帰を意味する。自らを「帝国」と考えている中国は自分の時代が到来したと歓迎しているに違いない。つまり「帝国」は国家のあり方として正しいと思っっているはずだ。それは西欧に起源をもつ民主主義の否定を意味する。

「帝国」は領域内に文化や制度の異なる諸勢力を抱えている。平等を理念

部を吸収することで勢いを得た。習、プーチン、エルドアン、モディらはそうした世界的な変化を背景に登場した「皇帝」とみなすことができる。

して学生、市民らを武力弾圧した。これは彼が「改革開放」、つまり資本主義の発展は民主主義なしでも可能だと判断したことを意味する。

30代 中国は民主主義から遠ざかるばかりだ。

30代 それは賭けだったのではないか。

年金 この「帝国」が民主主義に最も近づいたのは、1989年の天安門事件に至る民主化運動のときだ。「改革開放」によって後に「世界の工場」と呼ばれるまでに発展した製造業中心の産業資本主義が民主主義を要求したからだ。

年金 自由で平等な労働力を必要とする産業資本主義の発展にとって、民主主義の不在は足かせになる。しかし、世界の資本主義は先進諸国を中心にポスト産業資本主義に移りつつあった。つまり産業の牽引車が製造業中心の第2次産業からサービス、情報、金融などを中心とした第3次産業に交替しつつあった。

第2次産業を牽引車とする産業資本主義は、市場で売買される等質な労働力の存在なしには作動しない。政治的な言葉に置き換えれば、自由で平等な労働力の存在を必要とする。この段階の資本主義は民主制のもとで最も発展すると言っている。

先進諸国は長い産業資本主義の時代を経てそこに到達したが、中国は外資を導入することによってその成果をすぐにとり入れることができた。その結果、産業資本主義の期間を大幅に短縮できた。つまり民主制が求められる時代を速やかに通り過ぎた。

当時の総書記の趙紫陽が学生らの主張に共感を示した背景がそこにある。だが、民主化によって共産党一党独裁が終わることを恐れた鄧小平は軍を出

30代 ポスト産業資本主義も自由で平等な労働力を必要としているだろう。

とする民主主義に必須の国民の等質性が「帝国」には乏しい。「帝国」を正しい国家のあり方と考える限り、民主主義を選択することはあり得ないということだ。

30代 政治的な自由や平等は厳しく制限されている。

30代 中国の国民は自由や平等とは無縁なのか。

年金 それが保障されるには、西欧に起源をもつ民主主義の政体を採用することが必須となる。共産党政権にはその気が全くないし、国民も政治的な不自由と不平等を経済的な自由と平等によって埋め合わせることで現状を受け入れており、政権を倒してまでという機運は生まれていない。

ただ、遠い未来のユートピアの絵図の中でなら自由で平等な中国を想定することができている。資本主義が現在よりさらに高度化し、富の稀少性がゼロになったとき、経済的ではない、あるいは政治的ではない自由と平等を超えた、人間的とも言うべき自由と平等が実現する条件が生まれるからだ。

ニュース日記 850
中村 礼治

「帝国」の時代